

行動要素間の相互依存性を考慮した観光施策評価手法の提案

観光行動は、目的地選択、出発時刻選択、滞在時間選択、消費金額選択など複数の行動要素で構成される多次元選択行動である。すなわち、1つの行動要素の変化が他の行動要素の変化を連鎖的に引き起こす相互依存性が存在し、旅行者はこれら複数の行動要素を同時に考慮しながら観光行動を決定している。そのため観光施策立案において、異なる行動要素間の相互依存性を把握することは不可欠である。

本研究は、経済の活性化や雇用の創出などの効果が期待できる観光産業を、関西経済の牽引役と位置づけ、観光開発に資する方法論を提案するという立場から、各行動要素に影響を及ぼす要因と、行動要素間の相互依存性を同時に分析できる同時決定モデルの開発を目的に行った。具体的には、観光施策の評価において最も重要である観光入込客数と観光消費額に着目し、コンピュータ関数を用いた多数量生存時間モデルによる分析方法の提案を行った。

実証分析として、平成 21 年度の京都府と兵庫県の合計 35 地域を対象に、提案モデルを適用し、従来の相互依存性を考慮していないモデルの比較分析を行った。分析の結果、本提案モデルは従来モデルに比べて、モデル適合度が高いことから、本提案手法の有効性を示した。さらに、観光入込客数と観光消費額の間には正の相互依存性が存在することを実証的に明らかにし、相互依存性を無視した従来の分析方法では、誤った行動解釈を招く危険性があることを示した。

本研究では、観光入込客数と観光消費額の 2 つの行動要素のみに着目したが、本提案手法は拡張性が高く、3 つ以上の行動要素の同時決定モデルにも容易に展開することができる。

今後、モデルの拡張や観光に関するデータ収集、他地域への応用など実証分析を蓄積することによって、本提案手法が観光施策を検討する際の有用な評価ツールになり得ることを示した。